

大学図書館問題研究会 京都

京都市左京区吉田本町

京都大学教育学部図書室

(竹村気付)

大学図書館員の調査研究活動

沢井紀充

I 図書館問題への関心

先頃埼玉県にある国立婦人教育会館で開かれた第2回大学図書館研究集会（日本図書館協会大学図書館部会・国立私立大学図書館協力委員会）であいさつに立った東京都立大学図書館長の松浪有教授（英語・英文学）は、今日の大学図書館員が現状打開の「危機感」、「焦燥感」にかられ、「一種の緊張状態」に陥っているとして、これは、学術情報量の増大と多様さ、情報システム問題などからもたらされたものであり、「全日本の知的活動がそこに根ざしている」大学図書館に働くものの責任を痛感しているためである。そして人間と人間との関係の他に、新しく「人間と機械との関係」の問題が加わって、そこに不安感を感じている、と述べた。

この研究集会には、全国の113大学から200名余が参加し、大学図書館問題にたいする関心の強さを示したが、基調講演(1)「学術情報システムと大学図書館」の中で市川淳信教授（東京工大）が、アメリカで製作されたビデオテープを使いながら、近未来の情報システムの夢を描き、基調講演(2)「大学図書館は学術情報システムの中でどう変わるか」の中で田中久文氏（文部省）が「時流に遅れるな」と強調して、大学図書館員の緊張状態はますます強められることになった。

確かに大学図書館の職場では、現状を憂え「何とかしなければ」との気持が強まっている。しかしそれは単に受動的な不安感ではなく、現状とその打開の方法をめぐって、真の大学図書館の発展のあり方を探求するもっと積極的なものであると思う。

大学図書館問題研究会は、すでに昨年（大阪）の全国研究集会で、単なるネットワークの構成要素としての歪んだ図書館ではなく、大学の教職員・学生や国民の要求に応える総合的な図書館づくり、との方向を打出し、今年4月に京都で開かれた全国研究集会では、「教員・研究者に対する図書館サービス」「学生に対する図書館サービス」「大学図書館の“発展”と図書館員の役割」の三つの研究報告を中心に総合的発展の具体的なあり方をさぐっている。このうち、京都支部が報告した職員論は、「大学

図書館の発展の鍵は図書館員にある」として、図書館員の力量の強化、図書館員の団結と共同、全構成員の自治による大学図書館づくりの諸問題を論じている。(注)

以下の小論は、大図研としてのこのような到達点の上に立って、日常の、とくに個人ですすめる調査研究活動について筆者の私見を述べたものである。

II 課題をどう選ぶか

大学図書館員として調査や研究を始めるにあたって、具体的なテーマをきめるために次の4つの側面から考えてみると、さまざまな着想が得られるのではないかと思う。

(1) 「主題」への挑戦

主題に関する研究(学習)を、図書館過程における単なる「参考業務」に含めずに、大学図書館員として基本的に必要な訓練として位置づけることが重要である。

次に「主題」の考え方であるが、その図書館が所属している大学や学部・研究所の学問分野が、そこで働く図書館職員が研究(学習)すべき中心的な主題であることは当然だが、もう少し気楽に考えて、図書館職員が最も興味と関心をもって飽きない分野の問題——、これを「主題」と考えて、図書館の光を当ててみてはどうか。具体的にはその主題に関する書誌づくりなどから入っていくのである。

(2) 図書館過程の分析

圖書の選択と収集、分類と目録、蓄積、閲覧と参考、相互協力など一連の図書館過程の諸問題は、多くの研究課題を提供する。この場合、大学における研究と教育の実際とかかわらせて分析してみると、新しい成果を生むことになるだろう。

(3) 図書館の理論の考察

図書館活動の歴史や社会的役割を研究し、その根本問題を考える。また出版や「知的生産の技術」といった問題も図書館との関連で論じてみたいテーマである。

(4) 図書館政策への関心

新しい学術情報システムや図書館情報システムの問題がさかんに論じられているが、一つ一つの図書館をどのように充実させていくかという視点から考えてみる。図書館政策や図書館をめぐる動に目をとめ、職場の問題とも関連させて広く考えて行く。

III 具体的なすすめ方

(1) 京大班での経験

テーマがきまれば、それぞれ自由に研究をすすめていけばよいのであるが、できるだけ区切りをつけて、一応のまとめを支部報に載せるようにしたいものである。

京大班の社会科学グループでは、5人のメンバーが、それぞれ自分に合ったテーマをきめ、二週間に一度昼休みに集ってお互いの進行状況を交流し、参考文献のコピーなども示して、励まし合いなが

ら研究をすすめている。その最初の成果が、柴田正子「米国法律図書館協会」（『大学図書館問題研究会京都』14号）である。これは英米法に関する書誌づくりの過程で生れた副産物である。

次に、「書誌・索引づくり」と「“主題”教育学の研究」という二つの問題を取りあげて、具体的な研究活動のすすめ方について考えてみよう。

(2) 書誌・索引づくり

書誌や索引をつくる意義を次のように考えている。①この作業を通じて主題研究を深めると同時に、図書館技術を訓練し、文献感覚を磨く。②大図研として組織的にすすめることによって、図書館職員の間で共同財産を形成して行く。③機関誌上や日常のカウンターでの活用を通じて大学図書館の役割を高める。

この活動にとって重要な点は、活動の結果としての書誌や索引もさることながら、作成の過程において啓発される多くのことどもを記録することである。

婦人運動書誌グループは、自らも参加してきた婦人運動を「主題」とし、書誌づくりに入る前段階の作業として、京都大学所蔵の婦人関係図書の見録をつくることから始めている。各学部の分類表がまちまちなことから、カードひとつ引くことによっても想像力が訓練されるし、婦人問題についての多面的な考え方にもふれることになる。そして見録の分類別記載を考えるために婦人問題の構造へと関心が向かう。3人のメンバーが週1回集って作業の進捗状況を点検し、詳細な記録をノートしている。豊かな実りが期待されている。

(3) 「主題」教育学の研究

大学の各専門分野の教育方法について、個別の試みは無数であるが、「主題」教育学として一般化されているところはきわめてまれであろう。大学教育における図書館の役割を明らかにするために、当該主題の「教育学」について研究することが必要になっている。

具体的なすすめ方としては、①大学教育の目標と実際におこなわれている教育とをみる。②その中の図書館の実際の使われ方を調べる。③教研集会などに注目し、授業改善の工夫やカリキュラム改革などを知る。④図書館活動の可能性を考える——、などであろうか。

同様に、創造性の問題や研究過程論に着目して、その中の図書館活動の役割を考えることも重要である。

以上、京都大学における経験（まだ始まったばかりであるが）を紹介しながら、大学図書館員の調査研究活動のすすめ方について、その一端を述べた。大図研としての研究活動のあり方について、今後も私なりに考えていく第一歩としたい。

（京都大学経済学部図書室）

（注）『大学図書館の発展方向を問う——学術審議会答申とその後』（大学図書館問題研究会
1981年全国研究集会報告書）

大図研・京都支部第4回総会ひらかれる。

京都支部は、大図研事務局が関西に移行してから、会員をほぼ倍に増す事が出来、9月26日(土)、第4回総会をひらきました。7大学23名の出席で、1年の活動をふりかえり、今年1年の活動方針について、各大学の実情等も出し合いながら討論を深めました。

① 支部長あいさつ

京都支部は今年から特別重要になってくる。京都支部の活動が活発になっていなかったら事務局は関西に来ていなかったし、支部と常任の関係がうまくいかなくなると全国常任の活動にも大いに影響するので、京都支部の位置づけは最も重要になってくる。4月の研究集会で、京都支部から職員問題について、研究発表を行ったが、これは重要な問題である。選書・収書にしても、結局のところは、その大学のいとなみがあって、活動がなければ、良い蔵書構成を作ることが出来ない。実際の研究と教育が結びついた蔵書をつくる場合、選書ができる力を図書館員がもっていないければならない。図書館員の力量の問題が決定的にひびく。大図研はそういう点を着眼点としている唯一の組織である。研究活動については、層を厚く、巾を広くして、共同研究を行う。会員を1000名にするとやっているが、1000名の中味はそういう意味があり、京都から先進をきってやらなければならない。

② 1号・2号議案について

4月の研究集会は、活動の中味をつくるのに非常に大きな役割をはたし、会員も100名突破をめざし、99名に増すことが出来た。ただ、研究グループの発足は、支部委員中心の研究会がもたれた事と、機械化グループのみ結成されたにすぎない。今年は、図書館学に関する研究と書誌研究を同時にすすめてゆき、例会については、みんなの意見を参考にして、テーマを決めたい。

③ 新常任委員会の方針について

10月17日・18日に全国委員会が開かれる。その議案の内容は、12回大会の総括、81年度方針の具体化、春の全国研究集会の日時場所テーマを決める、全国大会の日時場所を決める。全国研究集会は大阪、京都でのテーマを継続し、大学図書館の総合的発展の中味を明らかにしてゆく。又、図書館界の民主的強化をはかる意味で、JLA・日本科学者会議等と日常的に連絡をとる。12回大会の分科会のテーマであった図書館の自由と平和問題とのかかわりについては、会報を通じて一年間討論する。組織活動については、関西への移行を契機に大図研の質・量を飛躍的に発展させるために会員一人一人がテーマを確立し、個人と支部を総合して輪をひろげる。

④ 討論の内容

京大班では、毎月第1土曜日に例会をひらき、各研究グループ、各書誌づくりグループの作業過程の報告をしたり、同時に各自のテーマについて助言を求めたり、情報交換などを行っている。とくに社会科学系グループを中心にして、婦人問題の書誌づくりとか英米法に関する書誌づくり等が進んでおり、この過程でAmerican Association of Law Libraryesについての論文ができた。(京大)

職員全員のエネルギーを結集して、民主的な図書館づくりをするために、まず職員の力量をたかめ

なければならない。そのために、まず主題に強くなる。図書館員が関心をもっているものを主題とし、それに図書的な光をあてる。たとえば書誌づくりで、その作業を通じて、一般参考図書をよく知る事ができるし、蔵書構成の問題にもかかわってゆけるのではないか。(京大)

今まで何となく大図研に入っていた人が、この書誌づくりの話聞いて、「ちょっとしんどいなー」という声がある。同志社大学は当面、機械化の問題でいっぱいである。ただ機械化のもつ意味を考えてゆく、そのへんから話を始めようと言っている。又、書誌づくりというのは自分の仕事と結びつけてやると楽しいはずなのに、そうならないのは、国立大学と違って、私学はいつ、どこに配転させられるかわからないという辺からそうなるのではないか。(同志社大)

今日、ここに来ているのは新前ばかりで、図書館に働くようになって3カ月。9月9日に班会をひらき、図書館の自由、障害者問題、図書館史と3つのグループをつくった。立命では個人のテーマをもって研究するということが非常におくれている。(立命大)

工織6名、京大1名で機械化グループをつくっているが、今までやってきたことは、東大情報図書館学センター主催のシンポジウムをテープで聞く。典拠ファイルの役割について、トロント大学の論文を学習する、LC、JAPAN・MARCの構造について、データベースについて中味の検討、京大大型計算機センター図書室のシステムについて等。現在NCR新版とISBDの関係について研究している。(工織大)

障害者医療、職業病、地域医療についての研究活動に参加し、医学・医療の基本的な考え方を身につけていこうと学んでいる。滋賀医大の状況を述べると、外国雑誌が年間20%近く値上りし、雑誌予算が切迫している。(滋賀医大)

ライブラリアンシップを出している私たちの研究会は 会費を納める、個人のテーマをもつ、少くともひとつの主題に強くなる、月例会・合宿に出る、年1回は論文を投稿する、の5つの義務があり、このメンバー全員を近い将来、大図研へむかえたいと思っている。(龍大)

研究活動については、たとえば今日の話聞いていて、婦人問題書誌でも京大だけでなく立命とドッキングすればかなり大きなものが出来るのではないだろうか。横のつながり、層のひろがりが出るようになれば。(府立大)

以上、4時半まで討論し、採決、新支部委員の選出を行い、全員一人ひとりが研究テーマをもち、小グループをつくり、励まし合って研究活動をすすめる事を確認し、第4回総会をおわりました。

新支部委員紹介

成山雅康(龍大)	篠原俊夫(京大・文)
竹村心(京大・教育)	帆橋正規(同志社)
片山淳(京大・附図)	灘本清五郎(立命)
白神順子(京大・工)	平元健史(工織)
堤豪範(京大・経済)	大沢紀子(京大・附図)

大学図書館 京都

京都市左京区吉田本町

京都大学教育学部図書室

1981. 11.13

(竹村 心 気付)

— 11月例会案内 — 何をどう研究したらいいか

テーマ

「利用者サービスを高める 資料研究をどうすすめるか」 大学図書館の総合的發展をめざして

講演

社会科学分野の「資料研究」をどうすすめるか

京大法学部図書室 柴田 正子

工学分野の「資料研究」をどうすすめるのか

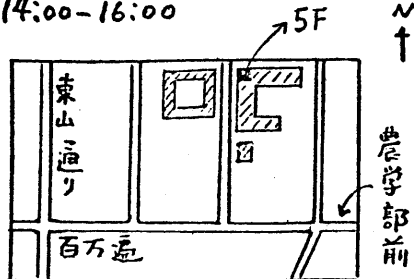
京大工学部図書室 林 茂栄

日時

11月21日(土) 14:00-16:00

会場

京大理学部
小会議室



※ 会費納入を
3000円 + 支部報 1000円

※ アンケートもよろしく。